

國學院大學學術情報リポジトリ

南九州の神楽における「岩戸開き」演目について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大山, 晋吾 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001615

南九州の神楽における「岩戸開き」演目について

The kagura of Iwato Biraki in Southern Kyushu

大山晋吾

キーワード：中世神話 民俗芸能 神楽 仏教神道

关键词：中世纪神话 民间表演艺术 神乐 仏教神道

要旨

日本の各地で「神楽」と総称される芸能が伝承されている。このうち、南九州(宮崎県～鹿児島県)を含めた九州地方に伝承される神楽は、天岩戸神話をモチーフとした演目を中心とする「岩戸神楽」である、とみなされてきた。この「岩戸神楽」という語句はその後も用語として用いられながら、近年までその内容が積極的に比較検討されることは少なかった。

こうした研究動向を踏まえ、本論では、南九州の神楽における「岩戸開き」の演目を対象として、「岩戸開き」演目の構成と詞章を中心として検討し、地方における神話の受容と変遷について、考察をおこなうこととする。

宮崎県中央部から鹿児島県にかけての地域には、「神武神楽」や「神冥七番」と呼ばれる「岩戸開き」の演目が伝承されている。これらの神楽は「法者」を基点として「小神子」「重山」「陰陽」「神武」へと続く一連の神楽であるが、その中に記紀神話における「天岩屋戸神話」の姿を見出すことは出来ない。演目構成と詞章の比較から、これらの演目が「天の岩戸」と「南天铁塔」とを習合させた密教的な世界観の中で「岩戸開き」をおこなうことを目的として成立したものであることが明らかとなった。

摘要

日本各地传承着总称为“神乐”的艺能。此中，包含南九州(宫崎县～鹿児島县)的九州地方传承下来的神乐以天岩戸神話为创作灵感的剧目被称为“岩戸神乐”。“岩戸神乐”一词也经常使用，但到近年为止对其内容却很少有人进行讨论。

在此种研究背景下，本文将以南九州的神乐中“岩戸开启”的演出剧目为对象，从剧目的构成和词章为中心进行探讨研究。并且针对地方对神话的接纳与变迁进行研究考察。

以宫崎县中央部到鹿児島县为止的广阔地域，传承着被称为“神武神乐”，“神冥神乐”等的“岩戸开启”的剧目。这些是以“法者”为基点，然后逐步向“小神子”“重山”“阴阳”“神武”等剧目连续进行的神乐。其中，并没有出现以记纪神話中的“天岩屋戸神話”的影子。从表演的剧目及词章的比较中可以得出了这类“岩戸开启”是“天之岩戸”与“南天铁塔”混合而成的密教型世界观下所形成的剧目的结论。

問題の所在

日本の各地で「神楽」と総称される芸能が伝承されている。このうち、南九州（宮崎県～鹿児島県）を含めた九州地方に伝承される神楽は、「出雲系統の神楽」、もしくは「出雲流の神楽」と研究史の上では定義されており、九州地方で演じられる神楽はこの系統の中でも特に天岩戸神話をモチーフとした演目を中心とする「岩戸神楽」である、とみなされてきた（西角井正慶 1934、本田安次 1966）。その後、南九州の神楽については小野重朗や山口保明、渡辺伸夫らによって研究が進められてきた。ただし、この「岩戸神楽」という語句は用語として用いられながら、近年までその内容が積極的に比較検討されることは少なかった。

こうした研究動向を踏まえ、拙稿「南九州の神楽における天照大神の表象について」（『伝承文化研究』16号 2019）では、現在伝承される神楽に「岩戸開き」演目の要素が色濃く残っているにも拘わらず、ほとんど検討されてこなかった南九州の神楽における「岩戸開き」演目について、①「岩戸開き」演目の構成比較、②「岩戸開き」演目の詞章比較、③詞章中の天照大神の描写比較、の3点を中心として検討を加え試論を述べた。しかし、天照大神の描写を中心に考察をおこなったため、南九州の神楽における「岩戸開き」演目全体の比較検討をおこなうには不十分な点が多かった。

そこで本論では、南九州（宮崎県～鹿児島県）の神楽における「岩戸開き」の演目を対象として、「岩戸開き」演目の構成と詞章を中心として検討し、地方における神話の受容と変遷について、考察をおこないたい。

1. 南九州の神楽

（1）南九州の神楽の概要

「岩戸開き」演目の検討にあたって、まずは南九州における神楽の概要について整理することとする。全域が薩摩藩領であった鹿児島県に比べ、宮崎県は高鍋・飢肥・薩摩藩など、複数の藩がそれぞれの地域で統治をおこなってきた。山口保明はこの地域差が神楽にも影響を与えていることに着目し、かつての藩領区分を基準として宮崎県内の神楽を7つの系統に分類した⁽¹⁾。これらの神楽のうち、とくに米良山地域の銀鏡神楽、高千穂町の高千穂神楽、椎葉村の椎葉神楽な

どが研究者の注目を集めている⁽²⁾。

こうした神楽はそれぞれ地域ごとに特色を持っている。例えば、薩摩藩領に属していた地域(宮崎県西南部～鹿児島県)では、神楽は「神舞(カンメ)」と呼ばれている。刀剣などを採物とした舞が多いこと、田の神舞が多く伝承されていること、大掛かりな舞庭を用いること、などが神舞の特徴である。



図1 南九州における神楽の分布

○…神楽 △…田の神様 □…巫女舞、灰色で示した範囲…旧薩摩藩領

鹿児島県教育委員会『鹿児島の民俗芸能—民俗芸能緊急調査報告書—』1992年
宮崎県教育委員会『宮崎県の民俗芸能—宮崎県民俗芸能緊急調査報告書—』1994年を基に作成

次に、それぞれの地域の神楽の伝承状況について整理する。文化庁の主導によっておこなわれた民俗芸能悉皆調査をもとに作成したのが、図1南九州における神楽の分布である。宮崎県が平成4年(1992)に実施した民俗芸能悉皆調査(宮崎県教育委員会 1994)では、207の神楽保存団体が確認されている。1つの神楽保存団体が複数箇所でも奉納する場合もあるため、実際は保存団体の数よりも多くの神楽が奉納されている。図1にみるように、県北部の山間地域を中心として伝承されているほか、県中央部から南部にかけても濃密な分布がある。

鹿児島県が平成2年(1990)から平成4年(1992)にかけて実施した民俗芸能悉皆調査(鹿児島県教育委員会 1992)では、34の神楽保存団体が確認されている。このうちの1件は内侍舞の流れを汲んだ巫女による神楽であるため、実際には33件の神舞が伝承されていることになる。この33件のうち、11件は田の神舞だけを伝承している。地域としては大隅半島に多く、とくに志布志市域に集中している。鹿児島県内の神舞は少数の演目のみを伝承していることが多く、伝承に困難が伴っている地域もみられる。

(2)「岩戸開き」演目の概要

「岩戸開き」演目とは、記紀神話における「天岩屋戸神話」を題材とした一連の神事劇である。この演目は南九州の神楽の中ではごく一般的なものであり、その特徴として次の点が挙げられる。

まず、神事劇としては単純な構成である。南九州の神楽では複数の演目にわたって「岩戸開き」演目が展開されるが、それらは単に1つ、または2つの神が登場して縁起を述べ、退場を繰り返す演目の連続であり、1つの演目中に複数の神が登場するという形式はとっていない。演出上の工夫として、天の真榊を掘る場面とされる「柴引」で実際に柴を引き抜く所作、天岩屋戸を手力雄尊(戸取明神)が押し開く場面「戸取」において用意された岩戸を投げ飛ばす所作、の2点が挙げられるが、これを除けば神事劇として素朴である。

次に、伝承地域によってその内容に差異が見られる。詳しくは次章で後述するが、およそ宮崎県北部を中心とした山間地域と、宮崎県中央平野部から県南部、鹿児島県にかけての地域では「岩戸開き」演目とされるものが異なっている。

この演目の差異に着目したのが小野重朗であった。小野の指摘によれば、南九州の神楽における「岩戸開き」演目は、その構成から①伊勢神楽系岩戸番組、②

神武神楽系岩戸番組の2系統に分類される⁽³⁾。小野は①の系統が宮崎県北部山間地域の高千穂町の神楽において最も複雑化していること、「手力男(太力男)」の演目のみが伝承されている事例が宮崎県に広くみられることから、もともと「手力男」のみであった素朴な「岩戸開き」演目が、高千穂町の神楽のなかで構成が複雑化していったと捉え、それよりも古くに成立した「岩戸開き」演目として、②の系統があったと推察している⁽⁴⁾。

小野が提唱した仮説の問題については、拙稿「南九州の神楽における天照大神の表象について」で述べているため詳細は省くが、この仮説は「神武神楽系岩戸番組」が単独で伝承されている事例が過去の文書類を含めても確認できないことなど、論拠の不十分な点が否めない。ただし、こうした小野の研究は「岩戸開き」演目の成立に関する問題提起として重要なものである⁽⁵⁾。

また、この小野の研究に関連するものとして、石塚尊俊、岩田勝、渡辺伸夫らによる祭祀者と神楽の関連に着目した研究が挙げられる。彼らの研究は中国地方及び九州地方を中心として、近世以前から「法者」と「神子」と呼ばれる男女の宗教者によって神楽祭祀がおこなわれてきたことを示すものであり、神楽の古態に神懸かりがあったことなどを実証したものである⁽⁶⁾(石塚尊俊 1979、岩田勝 1982)。この「法者」「神子」という言葉は小野が「神武神楽系岩戸番組」として挙げた演目群の中に、演目名として、また、そこに登場する神の名として挙げられている。また、これ以外の演目等でもその影響を窺うことが出来る。例えば高千穂町の神楽では舞手のことを「ホシャドン」と呼び、各地の神楽においても番付の早い段階で素面の舞として「方謝舞」(宮崎市船引神楽)、「奉社舞」(宮崎市大塚神社神楽)、「奉賛舞」などと呼ばれる演目が舞われている。

次章ではこうした先行研究も踏まえたうえで、演目構成の比較検討をおこなうこととする。

2. 「岩戸開き」演目の構成

(1) 「岩戸開き」演目の分布

前章で述べた通り、「岩戸開き」演目は南九州の神楽において広く伝承されているが、その内容は異なる。本節ではその分布と併せながら、内容について概略を述べることとする。まず、宮崎県北部の高千穂町とその周辺では、「岩戸開き」演

目は「岩戸五番」、もしくは「岩戸六番」と総称している。どの演目を「岩戸五番」に充てるかはそれぞれの神楽によって若干異なるが、おおよそ「柴引」「伊勢神楽」「太力男」「鉦女」「戸取」などが含まれる。この地域では「ミコトヅケ」と称して演目の配役にそれぞれ神名を配することがおこなわれるが、「岩戸開き」演目に登場する神々はみな日本書紀の神名となっている。また、「伊勢神楽」については素面の神職によるもので「天岩屋戸神話」を演目中に語るものとなっている。この他に県北部から西部にかけての山間地域、特に椎葉村や西米良村でも神楽の伝承は盛んであるが、これらの地域の神楽では「岩戸五番」のようなドラマ化した「岩戸開き」演目はおこなわれず、「戸取」や「伊勢神楽」、「手力男」などが少数ずつ伝承されている。

宮崎県中央平野部、新富町以南の地域に入ると、「法者」「陰陽」といった神々による「岩戸開き」演目が演じられる。この神楽は旧佐土原町なども含めた宮崎市域に濃密に分布し、「大神神楽」・「神武神楽」という総称で演目がまとめられている事例と、それぞれの演目名で伝承されている事例とがある。また、これらの「岩戸開き」演目が終わったのちに「手力男」「戸開」といった「岩戸開き」演目も併せて演じられる。例えば新富町新田神楽では、「大神神楽」の演目中に「法者」「稲荷山」「里人」「陰陽」「神武」が演じられ、間に演目を挟んだのちに「手力」「戸開」といった劇的所作を伴う「岩戸開き」演目が演じられている。この地域の特徴として、「法者」「稲荷山」「里人」「陰陽」「神武」の演目が固定して伝承されていることが挙げられる。

宮崎県南部の日南市はもともと飢肥藩に属しており、「岩戸開き」演目を含めた神楽が伝承されている。この地域での「岩戸開き」演目は「鉦女」「思兼」「太玉」「児屋根」といった神々による演目であり、高千穂町の神楽のように書記神話に則った神を配して「岩戸開き」を形成している。ただし、その中に「住吉」「龍蔵」といった神も含んでいる。

旧薩摩藩領地域でも「神武神楽」に相当する「岩戸開き」演目が伝承されているが、そこに現れる神名が異なり、「稲荷山」にあたる演目は「小神子」、「里人」にあたる演目は「重山」と呼ばれている。また、これ等の演目から連続して「手力男」などの「岩戸開き」演目もおこなうことが特徴となる。こうした一連の演目は「神冥七番」、もしくは「神明七番」と呼ばれている。この「神冥七番」は「岩戸五番」に比べてなお含まれる演目が一定せず、廃絶した鹿児島県串良町万八千神社

神舞では「龍蔵舞」「法者舞」「小命舞」「陰陽舞」「重山舞」「神武舞」「太力男舞」の7つの舞で「神明七番」としているが⁽⁷⁾、蘭牟田神舞では神祇講式を読み上げることがを「神冥七番」の一つとして組み込んでいる。

また、断片化した形で演目を伝承している例も確認できる。例えば宮崎県西諸県郡高原町の狭野神舞では、「小房」と呼ばれる素面の二人舞が伝承されているが、その詞章は「法者」の簡略化したものである。同様に同じく高原町の祓川神舞でも「陰陽」と呼ばれる舞が番付には残っているものの、陰陽2神による舞とされている。ただ、「神冥七番」が断片化して伝承されている地域でも、「龍蔵」「住吉」「太力」といった演目による「岩戸開き」演目は伝承されていることが多い。

表1 「岩戸開き」演目の構成

	①	②	③	④	⑤
神楽名	三田井神楽	梅尾神楽	九社神社神楽	生目神楽	荒瀬神楽
地 域	宮崎県高千穂町	宮崎県椎葉村	宮崎県日南市	宮崎県宮崎市	鹿児島県伊佐市
演目名	柴引	柴引	鈿女	法者	法者
	伊勢神楽	(連続せず)	住吉	稲荷山	小神子
	太力男	戸取	児屋根	里人	繁山
	鈿女	(連続せず)	龍蔵	陰陽	陰陽
	戸取	手力	戸隠	神武	神武
	舞い開き	伊勢神楽	手力男	(連続せず)	太力
				太玉	神明

出典：①『高千穂の神楽』藤屋写真印刷、1976年 ②『椎葉神楽発掘』岩田書院、2012年 ③、④筆者実見 ⑤『南九州の岩戸神楽』『隼人文化』24・25合併号、隼人文化研究会、1992年

(2) 「岩戸開き」演目の構成

表1「岩戸開き」演目の構成は、前節で述べた内容を基に、南九州における「岩戸開き」演目を抽出し、例示したものである。番付の順序で記入し、間に他の演目を入れるものについては連続しない旨を記載した。演目としてはいずれの事例も番付の後段に位置しており、①に代表される高千穂の夜神楽では夜が明ける時間帯に「戸取」が演じられるようになっている。

表1の①から⑤の通り、「岩戸開き」演目は2つの演目群に分かれている。つまり、①から③のように天鈿女命や天児屋根命が登場するものと、④、⑤のように

「法者」「陰陽」などの神が登場するものである。①から②の演目は主に宮崎県北部の神楽を中心に確認することができ、③から⑤の演目は宮崎県中央平野部から南部、鹿児島県にかけて確認することができる。ただしその名称や演目としての数え方には差異がみられる。また、日南市の神楽については「神武」という演目自体はあるものの、「神武」「霧島」「鶴戸」の連続する3演目として、「岩戸開き」演目とは別個のものとして番付の前方に位置している。

④～⑤の神楽は詞章にこそ「岩戸開き」との関連が認められるが、所作そのものからは「岩戸開き」演目であると確認することは難しい。以下に参考として、宮崎県生目神社での「法者」～「神武」演目の流れを示す。

まず、「方社」舞から始まる。鬼神面の一人舞で両手に幣を持つ。「方社」はひとしきり舞うと、「稻荷山」を呼び出す旨を述べ、そこから「稻荷山」が登場する。女面で、大幣と扇を持つ。「稻荷山」が舞っている間、「方社」は舞殿の横に立ち、「稻荷山」が舞い終わると次は「里人」を呼び出す。「里人」は翁面で、メボ（鬼神棒）と黒扇を持つ。「里人」は舞の途中で舞殿の中央に座り、「方社」と問答をおこなう。これが済むと「里人」も退出し、「陰陽」を呼び出すこととなる。鬼神面で両手に幣をもった「陰陽」が舞殿に入ってくると、「方社」は舞殿から退出し、その後は「陰陽」の舞となる。この舞が済むと、「陰陽」は「神武」を呼び出し、退出する。「神武」は男面で、両手にバチを持つ。また、このときにマネコズ（真似小僧）と呼ばれる赤面で滑稽な所作を伴うものも登場し、竹で組んだ井形の「タイコ」を持つ。



写真1 生目神社神楽「神武」



写真2 新田神楽「神武」

写真1 生目神社神楽「神武」で前方にいるのが神武、後方で「タイコ」を持つのがマネコズである。「神武」の舞はこの「タイコ」を中心としたものであり、最後に手にするバチで「タイコ」を突き通すような所作をして舞納めとなる。なお、写真2 新田神楽「神武」のように「タイコ」の形状は神楽によって異なり、新田神楽では「タイコ」の中心に据えられた赤い的を突き破って舞い納めとする。

この形式の「岩戸開き」演目では「法者」が一連の演目の起点となっている。小松里神社神楽（宮崎市）で、演目名が「呼び出し（方社）」となっているのも、その役割を端的に示したものとと言える。

これが④から⑤の演目群における現行の舞と所作であるが、宮崎市から新富町にかけての地域ではほぼ演目が固定されており、面についても「稲荷山」は女面、「里人」は翁面といったように同系の面を用いている。これに対し、神舞を伝承している地域では演目が断片的に伝承されている場合や、「臣下」や「住吉」といった神々が演目に含まれる事例もあり、登場する神々にも流動性がある。また、面についても廃絶した藺牟田神舞では「里人」と同様の演目と考えられる「繁山」の演目では「若男面」を用いて柴を背中に指すとしており、「陰陽」も女面を用いることが記されている。このように、⑤の地域では変動が大きい演目群であるのが、④を中心とした宮崎市から新富町にかけての地域で演じられている演目群では内容の統一がみられ、「小神子」が「稲荷山」に、「繁山」が「里人」に変更されている。小野は④の地域で伝承している「岩戸開き」演目こそが④、⑤の地域で伝承されている「岩戸開き」演目群の祖型であるとの見方を示しているが、少なくとも現行の④は比較的新しい時期に内容の整理・改変がおこなわれていると考

えられ、⑤の地域で確認できるものの方が古態を留めていると指摘できる。これは後述の詞章の面からでも確認でき、また、本来「法者」と対となるはずの「小神子」が「稻荷山」へと改められていること、山の神の象徴である柴を差した「繁山」が翁面を着けた老人として、能における「里人」のように土地の由来を語る「里人」に改められていることから指摘できる。

一方でこれらの演目そのものは前述の生目神楽の事例からもわかる通り、天岩屋戸神話を視覚化したとは言い難い。また、合わせて「太力」といった演目も伝承していることから、視覚的にも理解しやすい演目を後に導入し改変した、という可能性は否定できない。

しかし、⑤に見られるように、神舞の伝承地域では「太力」も「法者」などの演目から続けて演じられ、なおかつその詞章も独自のものを有している。こうした点を鑑みると、2つの系統の違いは新旧の差とするよりも、「天岩屋戸神話」を神楽という芸能の中に取り込む際、どのような立場から神話解釈をおこなったかの違いを示していると考えたほうが良い。解釈の違いが演目の差として現れ、そこに唯一神道による改作の動きなどがそれぞれの地域で影響を与えた結果、現在確認できる演目が成立していったと考えられる。つまり①～⑤の事例差は、解釈の段階差であるといえる。

3. 「岩戸開き」演目詞章の比較

前章では「岩戸開き」演目の構成から確認をおこなったが、本章ではそれぞれの詞章から、演目の内容を確認していくこととする。

まず、高千穂町を中心とした宮崎県北部地域においてみられる詞章を挙げる。

「伊勢神楽」

…素戔鳴命の曰く、父母の授け給う姉の天照大神には高天原をしらしめ、月読命には青海原を知らしめ、蛭子命は三年になれども足立たずして、天の磐楯船に乗せ風のまにまに放って、遂に摂州の海辺に跡を垂れ給う。我には葦原の中つ国を賜る故、今日本の地の主と言うは我なり。然るに天照大神我国の主となり給うこと不当なりと、大和国宇陀の郡うのの里と言う所に至り、矢剣を作り天照大神を従えんとせし御時、天照大神には早この事を聞こし召し、素戔鳴命を恨むとも、おろかと思し召し、天の岩屋奥深く閉じ籠らせ給

えば、大日本は無明の闇となること三年三月なり。…⁽⁸⁾

素戔鳴尊が武装して天照大神に反旗を翻すという、『太平記』「三種の神器来由の事」の条に類例がみられる逸話が語られるものの、書紀神話における「天岩屋戸神話」とはそれほど逸脱したものではないことが分かる。

次に挙げるのが、宮崎県南部から鹿児島県にかけての地域において広く伝承されている詞章である。この詞章の特徴として、「伊勢神楽」などのように特定の演目のみで語られるだけでなく、「岩戸開き」演目の中で省略されながらも繰り返し縁起として語られる、ということが挙げられる。この縁起を語る演目の中で代表的なのは「龍蔵」である。

「龍蔵」

其時天照大神殿は、すさのうのみこと々國をあらそい給ふて、天照大神殿は先には生れさせ給へ共、女子にて生れさせ給へば、日本のそしと成りたもう、すさのおのみことは以後にて生れさせ給へ共、男子にてましませば、日本のそう社と成り給ふ、其時天照大神殿は、女子が男子におとる事意根成るよとおぼしめし、日月の光をむばい取り、天の岩戸に閉ぢこもらせ給へば天下は雨夜の闇と成る…⁽⁹⁾

この縁起では姉である天照大神と弟である素戔鳴尊との家督争いが焦点となっており、天岩戸に閉じ籠ったのも素戔鳴尊に原因があるというよりは、天照大神の怒りが発端となったとしている。このような特徴的な岩戸縁起が宮崎県南部から鹿児島県にかけての地域に伝承されている。

ただし、縁起として不適當であると判断されたのか、多くの神楽文書においてこの詞章は改変されている。しかし、そうした文書の中にも天照大神が「世を貪り」と書かれているなど、その残存を見ることができる。

こうした天照大神の描写が、宮崎県南部から鹿児島県の神楽において多様な神を登場させる「岩戸開き」演目を成立させた一因であると考えられる。例えば、宮崎県高原町の狭野神舞では、天照大神に付き従って天岩戸で世話をおこなったとの縁起を述べる「臣下」という演目があるが、この神は、天照大神の怒りを鎮めるためとして滑稽な身振りで餅をつく所作をおこなう。

次に、「法者」「陰陽」の説く詞章について着目することとする。法者と「岩戸開き」との関連は他地域にもみられ、広島県比婆郡東城町戸宇の宮脇朽木家所蔵の「延宝八年神楽能本」の中にもみることが出来る。この能本では「四 天照大神之

山ドリコエ」で伊弉諾尊と第六天魔王との問答が載り、「七 天照皇大神岩戸出」で岩戸の縁起が語られる。下にそれぞれ引用する。

「七 天照皇大神岩戸出」

一 抑々御前ニ罷立尊法者ハイサナキノツカワシメノ尊トハ某カコトニテ候
天照大神 ソサノ尾ノ尊御アラソイノダン去テ太神岩戸ニ閉コモリタモウテ
ミコトタチ神楽ヲ始メテ太神悦ヒ有テ岩戸ヲ開キ 日月ノ光四方ニカ、ヤキ
目出度所ヲ舞納候⁽¹⁰⁾

・神楽始り 唐土ノホグト云ウ人ビ(ヤ) ツカイヲ作りカザリ 六十六人ノ尊
法者 大コハ天満天神 笛ハイシバノ明神 シヤクヒヤウシハギランギ女
舞人ハ御子社人法者⁽¹¹⁾

ここでは法者は「イサナキノツカワシメノ尊」とされており、また、66人の法者、社人、御子らが神楽を舞うことによって天の岩戸を開いている。一方で、宮崎県内の「法者」「陰陽」はどのように展開しているのだろうか。下に引用する。

「ほうしゃ」(宮崎市生目神社神楽)

住吉のつもりの浦を立ち出でて今日始めての旅の道ようよう急ぎ候ほどに高
天原に着きにけり しばらくこの処にたいりょう至しいなり山を召じ奉って
共に岩戸を祈らばとぞんじ候 いかにいなり山をもしもししいなり山をもしもし…
この処にいなり山をば召じ奉れども神めい今だ御納状是なく候ほどに…⁽¹²⁾

「陰陽」(宮崎市生目神社神楽)

…そもそも高天原に神とどまり「もしもしちめらがむつ」「かむろぎかむろ
ぎ」の命をば豊あし原の水穂のくにと安らげく平げくしろし召しことさし奉
り候こそはらへ給へ清め給め きんじょうさいはいさいはい通りのほっしゃ
通りのこみこう重山の上南天皇いんよう参りあつめ天の岩戸を祈り給れども
神めい今だ御のうじょなく是なく候ほどに神武を召じ奉って共に岩戸を祈ら
ばやと存じ候いかに神武もしもし神武もしもし…⁽¹³⁾

法者が高天原を訪れ、岩戸を祈ること、陰陽が祓詞のようなものを述べるこ
が確認できる。

宮崎市内で展開する「法者」から一連の舞は、演目と共に詞章の内容もほとん
ど同様のものとなっている。この詞章は、現在廃絶している宮崎神宮神楽におい
ても用いられていたことが分かっており、この神楽が周辺地域に影響を与えた可
能性があることを指摘できる。

また、これらの詞章からは「法者」が岩戸を祈るために高天原を訪れたこと、「通りのほっしゃ」「通りのこみこう」「重山の上」「南天皇いんよう」「神武」の神が天岩戸を祈るために舞庭に訪れたことが示されているものの、その内容はほとんど不明であるといつてよい。その原因としては、内容が不明確なまま口頭で伝承されたこと、詞章そのものが簡略化されていること、の2点が考えられる。このうち詞章の簡略化に対して、近世に書かれた鹿児島県側の神舞詞章を確認してみることにする。

「陰陽」(薩摩川内市藺牟田神舞) 1680年

…其陰陽ト者天竺ノ言也南天竺ニ陽有リテツタウトテ三ツノ堂有テツタウ赤堂白堂是ヲ三堂ト云其ヨリ出タル陰陽也…金剛界ハ常梵王胎藏界摩夜婦人はヲ陰陽之道ト云也…有想無想ノ如ク阿運ノ二字皆以一躰也阿字ハ陽運字ハ陰有ハ陽無ハ陰天ハ陽地ハ陰是南天ノテツタウヨリ出来テ陰陽ノ神ト名付末代ノタメニハ八宗九宗ノ法文ハ皆阿字門ト説タリ弥陀ノ教法八万諸聖教皆我ト説タリ…⁽¹⁴⁾

藺牟田神舞の詞章は、確認できる「陰陽」の詞章としては最も長大なものであるため、詳細は省く。ここで「陰陽」は、自らが南天竺の鉄塔の中より出てきたこと、阿吽の結合、すなわち両部不二を示していること、自ら諸経の一切である、と述べている。南天鉄塔とは密教において、大日如来の説く經典類を納めていたとする鉄塔であり、これを龍猛菩薩が開いたことによって密教經典は世に出たとする内容の説話である。

このように南天鉄塔と天の岩戸とを習合する考え方は、『神祇秘鈔』などにも類例がみられ、中世以降、密教的な神話理解として広まっていた。下記に挙げる『塵滴問答』にも、やはりこうした形式で「天岩屋戸神話」が説明されている。

『塵滴問答』

男問云。伊弉諾伊弉那申奉ル御神ハ誰人ソ哉。答云。此二人ノ御神ハ大日如来ノ化身両部木(不カ)ニノ除(深カ)秘。吾国開発ノ伝此二神ノ御事ニ在リ。内典外典ノ除(深カ)義密教ノ一大事是也。天照太神ノ岩戸ニ隠給事申シト云ルハ。南天塔ノ中ニ金剛薩埵定觀シ給シ事也。龍猛菩薩ノ鉄塔ヲ開ト云ルハ。諸神集テ天岩戸ヲ開シ事也。⁽¹⁵⁾

伊弉諾伊弉冉の2神とは何であるか、という問いに対して、この2神が大日如来の化身であり、男女それぞれで両部不二の思想を体現している、と答を挙げて

いるが、それに続く形で天照大神が天岩戸に籠ったことは南天の鉄塔に金剛薩埵が定観したことであり、龍猛菩薩が鉄塔を開いたということは、神々が天岩戸を開いたのと同様である、との説明が為されている。

こうした理解を基に、「陰陽」が形成されたであろうことは他の資料からも確認できる。同じく鹿児島県の神舞史料である「神舞一庭の事」を挙げる。

蓬原神舞「陰陽舞之叟」(志布志市蓬原熊野神社神舞) 1679年

是猿女君遠祖天鈿女命金胎不二神陰中陽陽中陰習之⁽¹⁶⁾

同「太手力雄舞叟」

…天者自然之道理、窟者金剛不壞儀、戸者開道理也。於于佛教金剛薩埵南天之鐵塔芥子以七粒打開云。於于神道神通妙神力妙神反妙以三妙力開岩戸太手力雄命也。是智慧也。⁽¹⁷⁾

この資料は詞章だけでなく、それぞれの舞について説明が加えられていることが特徴であるが、「陰陽」についてはこれが天鈿女の舞であり、金胎不二を示しているとし、「太手力雄」についても南天鉄塔の故事を示しながら、神道においては「神通妙神力妙神反妙」の三妙を以て岩戸を開くのである、としている。これは藺牟田神舞において「陰陽」が女面で表わされることも関連していると考えられる。また、三妙の唱言をもって岩戸を開くことは、この「神道」が三光三妙の神道、つまり唯一神道のことを示している。両部神道から唯一神道へと変化していく過程がこの史料から読み取れる。

要点

①「岩戸開き」演目の構成

南九州の神楽における「岩戸開き」演目をその構成から確認すると、2つの演目群に分かれていることが確認できる。1つは宮崎県の北部を中心としたもので、出現する神が「天鈿女命」、「太玉命」、「天児屋根命」、「太力雄命」のようにある程度定まっており、「天岩屋戸神話」に基づいた一連の物語が視覚化されたものである。これに対し、宮崎県中央部から鹿児島県にかけては「法者」、「小神子」、「繁山」、「陰陽」、「神武」といった神々が岩戸開きの祈念のために登場する。これらの演目は視覚的にも「天岩屋戸神話」を視覚化したとは言い難く、また、演目が断片的に伝承されている場合や、「住吉」や「臣下」と呼ばれる神々もこの演目

に含まれている事例もあり、登場する神々に流動性がある。この二つの差は、神話を芸能に組み込む過程で、特に神舞の伝承地域ではどのような理論を基に神話解釈をおこなったか、仏教や陰陽道の影響を受けた神話か吉田神道の影響を受けた書紀神話かという系統差による、と同時に、中世的か近世的かという形成時期の段階差を反映しているものと考えられる。

② 仏教神話に基づく「岩戸開き」演目

①に述べた2系統の中にも差異が確認できる。宮崎市内から新富町にかけての地域で伝承されている「法者」から「陰陽」にかけての演目は、芸態から詞章まで共通した内容を持っている。これらの地域では詞章の簡略化がみられ、その詞章の中では該当地域において「稲荷山」、「里人」とされる演目の神名が「小神子」、「繁山」と呼ばれていることから、この地域では演目名が変更され、詞章の整理・簡略化が比較的新しい時代におこなわれたであろうことが推察できる。神舞の伝承地域に残されている詞章を確認すると、この演目群は仏教的な「天窟屋戸神話」理解に基いた内容であり、法者・小神子が山神などの神々を御神屋に招きその威力を発揮させ、最終的には金胎不二思想の体現である「陰陽」の登場によって「天窟屋戸」＝「南天鉄塔」が開扉されるという一連の物語を示している。このように南天鉄塔と天の岩戸とを習合する考え方は、『神祇秘鈔』などにも類例がみられ、中世以降、仏教的な理解の上で解釈された神話の内容が演目の成立に影響を及ぼしたものであることを指摘できる。しかし非常に仏教色の強い内容であったために、蓬原熊野神社の史料に確認出来るように仏教的な神話理解から唯一神道的な神話理解へと解釈が変更されていき、その過程で演目の脱落、詞章の変更がおこなわれたと推察できる。こうしたことから、南九州の「岩戸開き」演目には「天窟屋戸神話」を演劇化したものだけでなく、中世以来の仏教的な神話理解と法者・神子という宗教者が演目の中に組み込まれた形で成立した「岩戸開き」演目群が伝承されてきたことを指摘できる。

注

- (1) 「高千穂系神楽」、「椎葉系神楽」、「米良系神楽」、「霧島神舞系」「延岡・門川系神楽」、「高鍋系神楽」、「宮崎・日南系神楽」の7系統とする。
- (2) いずれも国の重要無形民俗文化財に指定されている。鹿児島県の神舞は国の重要無形民俗文化財の指定を受けていないが、旧薩摩藩領地域としては宮崎県西諸郡郡高原町の2地区に伝承されている神舞が「高原の神舞」として指定を受けている。

- (3) 小野重朗「南九州の岩戸神楽」『隼人文化』24・25合併号、隼人文化研究会、1992年、1頁。
小野は②の系統の中でも宮崎県内で伝承されているものが古く、鹿児島県内のは新しいものである、との見解を示していた。
- (4) 前掲(3)4～6、11～12頁。
- (5) こうした視点に基づいた研究としては、前田博仁による一連の研究が挙げられる。(「宮崎の神楽に見る「岩戸開」関連演目に関する考察」『みやざき民俗』第68号、鉦脈社、2016年)
- (6) これに関連して、星優也による研究も挙げられる。星は途絶してしまった鹿児島県祁答院町の藺牟田神舞に着目し、「岩戸開き」演目中に「神祇講式」が用いられていることを指摘し、在地での「神祇講式」の受容と芸能との結びつきを説いている。
- (7) 所崎平「神明七番論議」『鹿児島民俗』第116号、2000年。
- (8) 小手川善次郎「高千穂神楽」藤屋写真印刷、1976年、209頁。
- (9) 高原町教育委員会『高原町祓川・狭野の神舞(神事)一本文編一』2000年、35～36頁。
- (10) 「延宝八年神楽能本」『重要無形民俗文化財 比婆荒神神楽』東城町教育委員会、1982年、580頁、解説・校注は岩田勝。
- (11) 同前 583～584頁。
- (12) 生目神社神楽保存会より提供いただいた。
- (13) 同前。
- (14) 自筆版『神舞一庭之事』渡辺伸夫氏より提供いただいた。
- (15) 「塵滴問答」『続群書類従』32集上、雑部936巻
- (16) 所崎平編「資料・蓬原神舞文書」『鹿児島民俗』第111号、鹿児島民俗学会、1997年、70頁。
- (17) 同前 71頁。

参考文献

- 西角井正慶 1934 『神楽研究』
本田安次 1966 『日本の民俗芸能一 神楽』
牧山望・所崎平 1976 『藺牟田神舞』
石塚尊俊 1979 『西日本諸神楽の研究』
小野重朗 1986 「神楽の竜と綱引の竜」『隼人文化』17号
鹿児島県教育委員会 1992 『鹿児島の民俗芸能』
宮崎県教育委員会 1994 『宮崎県の民俗芸能』
鹿児島県教育委員会 1980 『熊野神社神舞保存記録報告書』鹿児島県文化財調査報告書第27集
渡辺伸夫 1991 「鹿児島県入来神舞資料」『演劇研究』第14号、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館
鹿児島県教育委員会 1992 『鹿児島の民俗芸能一民俗芸能緊急調査報告書一』
宮崎県教育委員会 1994 『宮崎県の民俗芸能一宮崎県民俗芸能緊急調査報告書一』
村田熙編 1995 「湯之尾神舞論議集」『鹿児島民俗』第一〇七号、鹿児島民俗学会
所崎平編 1997 「蓬原熊野神社神舞資料」『鹿児島民俗』第111号、鹿児島民俗学会
高原町教育委員会 2000 『高原町祓川・狭野の神舞(神事)一本文編一』
山口保明 2000 『宮崎の神楽一祈りの原質・その伝承と継承一』鉦脈社
日南市教育委員会 2013 『日南市の民俗芸能』